

「シャタパタ・ブラーフマナの補遺部について」

パウル・ティーム教授

詩節の直訳

「彼方のあれは充満である/満たされている。
此方のこれは充満である/満たされている。
充満/満たされたものから充満/満たされたものが汲み上げられる。
充満の充満 (= 充満の全部) を取り去ったのち、
残されたものは充満である。」

この詩節は『シャタパタ・ブラーフマナ』(以下Ś Bと訳す)の最終章 マーディヤンディ
ナ派の伝本(M)では第14章、カーンヴァ派の伝本(K)では第16章 ^{アディヤヤ}の最後の2課の冒頭
に掲げられている。言い換えれば、この詩節によってŚ Bの末尾、すなわちŚ B(M)第14章第
4課第1節〔Ś B(K)第16章第3課第1節〕にはじまる所謂『プリハッド・アラニヤカ・ウ
パニシャッド』(BĀU)の最終部分がはじめられるのである。

ヴェーダンタ学派不二元論派の偉大な哲学者シャンカラ(西紀800年ごろ)は、カーン
ヴァ派所伝のBĀUに対する注釈を著したが、彼によれば、BĀUは各2課を含む3部分から成っ
ている。すなわち、^{マドゥ}蜜部、ヤージュニャヴァルキヤ部、^{キラ}補遺部である。この第3の部分が上掲
の詩節に始まるものである。Ś B(M)の奥付も対応箇所をウパニシャッドの終わりともみなして
いる。

以下には、シャンカラに倣って、上掲の詩節にはじまるŚ Bの最後の2課を「補遺部」とよ
ぶこととする。

この補遺部は、シャンカラが主張するように、またŚ B(M)の奥付が前提しているように、
元末、BĀUに属するものであったかどうか、この問題について、私はシャンカラ及び上述の
奥付に同意しがたい十分な根拠があると考えている。この講演において私は次の3点を立証し
たい。

- (1)補遺部はBĀUの補遺ではなく、白ヤジュルヴェーダ全体に対する補遺である。
- (2)補遺部には日常生活における行動や実践に関する教えが見られるが、それらは学習を終えて
家長としての生活に入ろうとするヴェーダ学習生(ブラフマチャーリン)に向けられたもので
ある。
- (3)補遺部の導入部分の詩節は、シャンカラが考えたように ^{ブラフマン}梵の二相に関する哲学的な叙述で
はなく、師がまさに彼の許を去ろうとする弟子に対して、教えの性格・知識の本性について述べ
たものである。

“On the Khilakāṇḍa of the Śatapathabrāhmaṇa”

Prof. Paul Thieme

pūrṇám adāḥ pūrṇám idám

pūrṇāt pūrṇám údacyate

pūrṇásya pūrṇám ādāya

pūrṇám evāśiṣyate

=ŚB(M) 14.8.1, ŚB(K) 16.7.1, BĀU(K) 5.1.1

This verse opens the two last adhyāya- ("lesson") of the last, the 14th kāṇḍa of the ŚB (M), and the 16th kāṇḍa of the ŚB (K). In other words, it opens the finish of the ŚB, which is considered to be the last part of the so-called Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad, which starts in ŚB (M) with kāṇḍa 14, adhyāya 4, brāhmaṇa 1, and in ŚB (K) with 16.3.1.

The great advaita-Vedānta philosopher Śan`kara (around 800 AD) has written a commentary on the BĀU in the Kāṇva recension. For him the BĀU consists of 3 parts, each one comprising two adhyāyas: the Madhukāṇḍa, the Yājñavalkyakāṇḍa and, thirdly, the Khilakāṇḍa, i.e. the "supplementary part". This third part is the one starting with our verse. The colophones of the Mādhyandina recension of the ŚB (ed.A.Weber) also consider the corresponding part as forming the end of Upaniṣad.

Following Śan`kara I shall call henceforth the two last adhyāyas of the ŚB, introduced by our verse, the “Khilakāṇḍa”.

As to the question whether this Khilakāṇḍa would belong —by origin —to the BĀU, as is asserted by Śan`kara and presupposed by the colophones of the Mādhyandina recension also, —as to this question I believe to have good reasons to disagree with Śan`kara and those colophones. In this paper it is intended to prove the following three theses:

- (1) The Khilakāṇḍa is not a supplement to the BĀU, but to the whole white Yajurveda.
- (2) Instructions concerning behaviour or practices in daily life in the Khilakāṇḍa are addressed to a brahmacārin who has finished his studies and is about to enter the life of a householder.
- (3) The introductory verse of the Khilakāṇḍa is not, as Śan`kara thinks, a philosophic statement on the two forms of brahman- (n.) —but a statement of the teacher to his departing pupil on the character of instruction and the nature of knowledge.

Abbrev: BĀU= Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad
(K)=Kāṇva(-recension)
(M)=Mādhyandina(-recension)
ŚB= Śatapathabrāhmaṇa